平成19年2月

村上大樹　学位論文審査要旨

主　査　　井　藤　久　雄
副主査　　村　脇　義　和
同　　池　口　正　英

主論文

Expression of phosphorylated Akt (pAkt) in gastric carcinoma predicts prognosis and efficacy of chemotherapy

(胃癌におけるリン酸化Akt発現は予後と化学療法の効果を予測する)

（著者：村上大樹、辻谷俊一、尾崎知博、斎藤博昭、堅野国幸、建部　茂、池口正英）

平成19年　Gastric Cancer　掲載予定

審　査　結　果　の　要　旨

本研究では胃癌におけるpAkt発現を免疫組織化学染色にて検出し、臨床病理学的意義について検討、さらにはP53発現との関連と、化学療法の効果との検討も行ったものである。その結果、進行癌症例においてpAkt蛋白陰性群と陽性群の間にのみ5年生存率に有意な相関が認められた。Cox比例ハザードモデルを用いた多変量解析の結果、深達度やリンパ節転移とともにpAkt蛋白発現が独立した予後規定因子であった。さらにpAkt蛋白陽性群においてのみ化学療法による生存率の向上が有意に認められた。漿膜浸潤胃癌においてpAkt蛋白発現とP53蛋白発現の組み合わせと5年生存率の相関では蛋白発現同時陽性群が予後不良であると判明した。本論文の内容は、pAkt蛋白発現が胃癌患者の予後予測と化学療法の効果予測に有用である可能性を示唆し、さらに漿膜浸潤胃癌において予後を予測する上でpAkt蛋白発現とP53蛋白発現との組み合わせが有用であることを示唆するものであり、進行胃癌の化学療法効果予測の面で明らかに学術水準を高めたものと認める。